

在日中国朝鮮族若年層の社会統合に関する質的研究

——社会統合の三側面とエスニックコミュニティに着目して——

JIN Longjun

本稿は、在日中国朝鮮族の若年層における社会統合過程を、経済的統合・文化的統合・社会関係資本の三側面から捉え直し、その過程においてエスニックコミュニティとしての全日本中国朝鮮族連合会（以下、連合会）がいかなる意味を持つのかを明らかにすることを目的とする。とりわけ連合会を、「ある人にとっては資源であり、ほかの人にとっては負担となる」のような可変的な場として扱い、当事者の社会的属性とライフステージに応じて、連合会の「資源性／制約性」がどのように入れ替わるのかを検討した。

分析枠組みとして、統合を三側面に操作化したうえで、連合会との関係を参加あるいは不参加の二分法ではなく、「連合会との距離」として概念化し、資源の「動員可能性」を鍵概念として導入した。研究データは、20～30代という若年層の在日中国朝鮮族A～Eへの半構造化インタビューであり、事例内または事例間の照合を通じて、上位テーマを再編する手続きで比較分析を行った。

比較分析の結果、連合会の社会関係資本としての性質は固定的ではなく、①転機局面で経験を動員できる入口があるときに資源化され、②資源獲得の代替経路が厚く、必要な資源の需要が部分的にしか重ならないときには限定的資源にとどまり、③必要資源が一致せず参加コストが上回るときには負担／不要となるという分岐が確認された。

さらに、この「流動性」は、当事者の心情の揺れだけで説明できない。むしろ、①ライフステージ移行による必要資源の変化、②時間資源・物理的距離・参加入口・規範適応といった動員可能性条件、③結束型資源／橋渡し型資源の方向性が局面ごとに異なる評価を受けること、という三要素の組合せによって生じることを示した。総合考察では、統合の三側面は必ずしも同一のペースで進行するわけではなく、資源経路の偏りやコスト配分の差異として、側面間に「ねじれ」が生じ得ることを示した。

以上を踏まえ、本稿は、エスニック組織を「支援／隔離」の二分法で評価するのではなく、若年層の移行局面に即して、資源の動員可能性と距離調整の実践から動的に捉える必要性を提起した。実践的示唆としては、若年層支援を「参加させること」だけに収斂させない必要がある。具体的には、誰に相談すればよいか分かる入口を整えること、また限定参加でも関われる設計を用意することが重要である。これらは、資源を必要な局面で動員できる状態をつくるための条件整備である。